

今回（2019 年度後期）の経済学部「授業改善アンケート」においては、実施必須科目 197 科目の内、193 科目でアンケートが実施されており、98.0%の実施率となっている。4 科目で未実施となっているが、履修登録者数が少ない科目においては、アンケート実施時に欠席者が幾分か発生していると実施必須条件（10 名未満）を下回る場合があることに留意されたい。

結果全体を通してみると、回答対象となっている設問項目の 12 項目中 6 項目において 5 点尺度で平均値 4 点以上となっており、2017 年度までの「授業評価アンケート」と同様に概ね良い評価を得ているものと考えられる。うち、「設問 1：欠席回数」はトータルで 4.24 ポイント（逆転項目）となっており（4 割超が欠席 0 である）、学生が積極的に授業に参加していたことが伺える。

他に評価が高かった項目としては、「設問 3：教員は休講や遅刻をすることなく授業を行っていた (4.22)」「設問 4：教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった (4.10)」「設問 6：教員は教室内が学習にふさわしい状態（私語等対応）に保たれるよう心掛けた(4.16)」「設問 8：シラバスと授業の内容が一致していた(4.17)」等が挙げられる。これらは、学生達の出席率の高さと共に、彼らの授業に対する高評価を示すものと考えられるが、一般に「授業への出席率の高さ」をもたらす主要因（の一つ）は、「授業に対する高評価」であろうから、この点ではそのまま理屈通りとも言える。

一方、評価の比較的低い項目については、「設問 5：この授業のレベルはあなたにとって適切であった (3.88)」と「設問 7：教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した (3.86)」が挙げられる。この 2 項目は、大学全体及び各学部においても、評価が低くなる傾向にある。この点については、例えば設問 5 の一つの解釈としては、「当該の授業のレベルが自分にとって適切なものであるか否かの判断は、授業で扱う学問分野等についての一定以上の知見やある程度の俯瞰図を持っていないと困難さがある」とすれば、学部生が回答しているアンケートにおける評価が他項目と比して低くなるのは当然とも言える。この観点からすれば、この設問について今回調査で「どちらでもない」が 22.9%となっているのは、「どちらでもない⇒どちらとも言えない/自分にはまだ判断できない」として約 5 人に 1 人の学生がこの判断を留保したものとも考えることもできる。また、設問 7 については、当然のことながらクラスサイズに依存しており（例えば、100 名や 200 名の教室で発言・議論を積極的に促したらどうなるかは状況による）、そのため、比較的大講義の多い経済学部の平均値が、例えば、「全学共通教育（国際センター）」のそれ (4.68) と比して低いものとなっているのも当然と言えば当然であろう。

また、ポイントとして 2.38 と最も「評価」の低かった「設問 12：授業時間外の事前・事

後学習時間」は、12 項目中で唯一、授業時間外のパフォーマンスを尋ねるユニーク項目であるが、2017 年度までの「授業評価アンケート」における相当項目と同様、低い評価となっている。この回答分布を詳しくみると「ほとんどしていない」が凡そ 3 割、「0.5 時間未満」までで凡そ半数超、となっており、この傾向は、大学全体及び各学部においても見て取れる。

また、授業への全般的評価を示すものとして設定されている「設問 10：この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」は 4.01 であり、この数値は良好なものと言えよう。設問 10 との相関係数の観点では、学生自身の成果実感項目「設問 9：この分野への興味・関心が引き起こされた」が 0.84 と最も高く、他に授業レベル（設問 5）とシラバスとの一致度（設問 8）、また、教員の授業スキル項目群（設問 4、設問 11）が高くなっている。

最後に授業手法（Ⅲ）、資質・能力の向上（Ⅳ）は、昨年度から導入された調査項目であるが、とりわけⅣについては、知識・学力が突出している一方で、他の資質・能力についての回答は押し並べて低位に留まっている点が注目される。この傾向は、大学全体また各学部においても同様に見出せるが、或いは、これらの資質・能力向上の差分を半期 2 単位の個々の科目毎に区別して実感することは、多くの人にとって困難さがあるのかもしれない。

（以上）